

2024. 8. 28 トンボとの出会いが豊かな体験の入り口に

夏休み明け3日目。夏休み初日に年長児でトンボを捕まえた子がいました。

その子は捕まえたトンボは虫かごに入れておきました。

すると、次の日の朝トンボは亡くなっていました。年長児らはショックを受けながらも、墓に埋め、またトンボを捕まえに行きます。

そして、捕まえて虫かごに入れると、次は「餌を入れよう」とバツタを入れておきました。

次の日トンボはまた亡くなっていました。

今日の朝、担任より子供たちにトンボについて話をしました。

「なんでトンボは死んでしまったんだろう？」

「お家が小さかったんじゃない？」

「えさ、入れたのにな…」 「水飲みたかったんじゃない？」 子供たちなりにいろいろな思いが出てきます。

「その虫かごに土とから草とか入れて、外と同じようにしたらどう？」と子供たちからアイデアも出てきました。そして好きな遊びが始まりました。

すると、I男が教師のところにやってきて、「先生、飼育図鑑でトンボの飼い方を調べたらいいんじゃない？」と言いました。「そうだね！」と教師とI男で図鑑やタブレットを見て調べます。そこにN男とT男もやってきて、「僕も一緒に考える！」と仲間に入ります。

飼い方の図はなかったのですが、餌が書いてあります。「ハエやチョウ、蛾とか食べるんだね！」

「でも餌が捕まえれなかったら、小さいコオロギやミルワームってやつでもいいみたい」「ミルワームって何？」

「ぼく釣りでこんなやつ使ったことあるよ！」と話題は広がっていきます。そしてよく見ていると、「あ！このハグロトンボ、前幼稚園のお外にいたよ！」 「オニヤンマって北海道にもいるんだって！」と他のいろいろな情報にも気付いていきます。

トンボを捕まえに行きたいという思いが高まっていたので、熱中症対策をして、I男たち3人と教師と一緒に、短時間だけ園庭に出ることにしました。

園庭にはトンボが飛んでいました！ 「いた！！」と追いかけてみますが、なかなかつかまりません。

「やっぱ時速70キロははやいな…」とつぶやくN男。高いところにいくと、「小学4年生になったらつかまえることができるかな…」とI男。園庭にいる時間が長くないように、教師は「中で作戦を立てよう」と声をかけました。すると、N男は「もっとトンボについて調べよう！」と図鑑やタブレットを持ってきます。そして「トンボの敵はツバメとカマキリと…」と調べ、画用紙に書いていきます。何人か人も増え、作戦タイムは続きます。

作戦タイムが終わると、I男は他の子に連れられて、年中の部屋でスライムのシェービングクリームを混ぜて、フワフワスライムを作ってきました。そして、N男と「これをマシュマロみたいにして、トンボをおびきよせよう！」と作戦を立て、紙に書いていきます。フワフワスライムを作りながら、思いついたのかもしれませんが、好きな遊びの後のみんなの時間で、トンボについて調べたことや作戦について、クラスの子たちに紹介をするI男とN男。その言葉には力があり、二人の意気込みが伝わってきました。

昼遊びの時間、外が曇ってきたので、I男とN男は教師と一緒に再度園庭に繰り出しました。I男はさっそく園

庭の真ん中にマシュマロをセットします。すると、偶然かトンボが近くを通ります。「きた!!!」とトンボを追いかけるI男。それでもなかなか捕まえることができなかったのですが、最後の最後に捕まえることができました。

「どこにいれよう！小さい虫かごとまた死んじゃうよ」とI男。朝の話は脳裏に浮かんでいます。教師は、「ちょっと待って！」と手作りの大きな虫かごを持ってきました。「これなら大丈夫だよ！」とI男。早速保育室の中で見ることができるようセットし、その中に捕まえたトンボを入れました。

そしてじっくりトンボを観察しているI男でした。

降園前に「トンボのめがね」をみんなで歌いました。最後に曲に合わせて「みんなトンボになってみよう！」と教師が言うと、保育室にいるトンボを見に行く子供たち。「羽はピンと伸びてるね！だから腕ものばさないと！」

「いや、先っちょはちょっと曲がっているよ！」と手首を曲げる子。「羽は4枚あったよ！はやく動かせばいいかな…」など表現遊びとして楽しみながら、トンボの特徴にも気づきが生まれていました。

帰りI男の保護者の方にその話をすると、前日他の友達がトンボを捕まえたのを見て、嬉しかったのと同時に自分も捕まいたいという思いが芽生えていたようです。その思いが、行動となって現れます。そこには、その思いを支える仲間の存在、興味・関心を高める図鑑からの情報なども大きな要因となっているかもしれません。

そして、捕まえることができた成功体験はI男にとって心が動く出会いへとつながっていったのでしょうか。その一連のプロセス全体がI男にとっての豊かな体験の入り口になっていくのかもしれませんが、出会いと気づきの積み重ねは「好きになる」きっかけとなっていきます。

またどの広がっていくのかはわかりませんが、共に様子を見守っていきたいです。

